『朱色優陽―アケイロユウヒ―』 1

想隆　泰気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『朱色優陽―アケイロユウヒ―』１

【Ｎコード】
Ｎ６６５７Ｍ

【作者名】
想隆　泰気

【あらすじ】
少年は世界の全てを拒絶していた。
家族、学校、教師、クラスメート――ただ一人の味方である筈の、幼なじみの少女さえ。
彼は馴れ合いを嫌い、『優しさ』を『甘え』と吐き捨てる。
そんな彼にとって、病院と言う場所は『甘え』と『弱さ』の象徴でしかなかった。

だが、彼はそこで、一人の女性に出会う。
入院患者である女性。本来ならば、『弱者』として忌避すべき相手。
しかし少年は、彼女のどこかとぼけた笑顔と、つかみ所のない言動に翻弄されていく。

戸惑いといらだちを感じながらも、少年のココロは次第にその色を変えつつあった――

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》（前書き）

『プロローグ』とは分離しています。よろしければこちらもどうぞ。
↓ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６６１３ｍ／

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［1－1］

病院は嫌いだ。
白を基調とした場所。混じり気のない純粋な世界。一切の汚れを排除した無菌の空間。
――うらぶれた弱者共の吹き溜まり。

吐き気がする。こんな場所が世界に存在することも、自分が今、こんな場所にいることも。
シクシクと痛む頭の傷と、大げさに巻かれた白い包帯が忌々しかった。

小うるさい監視役がいなくなった隙に、重々しい沈黙が支配する待合室を後にしたのは当然のことだった。
特に行く当てがあった訳じゃない。この病院で過ごしたことはない。院内の構造など分かる訳もなく、ただ人目を避けるように静寂な白い廊下を進んだ。
人気の無さと比例して増大する静寂は、ヒトの陰鬱な気持ちを増幅する。
けれど、陰気で弱々しい弱者の群れが視界から消えただけでも、幾分ココロは晴れやかだった。

辿り着いた先は、皮肉なほどに眩い陽光が降り注ぐ緑の庭。あまり入院患者も寄りつかないような、小さな中庭だった。

――人々に忘れられた、小さな安らぎの空間。

気がつけば、建物のほど近くに植えられた、背の高い木の根元に腰を下ろしていた。
湿気と熱気を帯びてきた初夏の風が、頭上で微かな葉擦れの音を奏でていた。
それは、この静寂にあっては心地好いざわめきで、安らいだココロは、自然とポケットの中に忍ばせた大人の嗜好品へと手を伸ばさせた。
掌大の四角い箱の中から一本を取り出して、口元へと運ぶ。
共に取り出したライターに灯を点そうとして――
動きを止めた。

別に、年端もいかぬ身の上でそれを嗜むことに、罪悪感があった訳じゃない。そんなものがあれば、端からこんなもの吸ってはいない。
動きを止めたのには――否、動けなくなったのには、理由がある。

頭上の心地好い葉擦れの音。
しかし、それが心地好かったのは、実は一瞬のことだった。
ポケットからそれを取り出してすぐ、頭上の葉擦れは奇妙なほどに騒々しいものに変わっていた。
そう、まるで、生い茂る葉をかき分けて、何かを探しているような。
――何を馬鹿な。こんな都会の真ん中で、野生動物でもあるまいし。まして、地上数メートルはあろう自らの頭上で、捜し物などする人間など居ようはずがない。
誰だって、そう思うだろう？
だから、それを口に銜えたまま、視線だけで上を見上げたのは、何も誰かの存在を見つけようと思ったからじゃない。
……にも関わらず、だ。

――彼女の姿を、そこに見つけた。

見つけようなどと思わなくても、その衝撃的な姿は、否応なく視界に飛び込んできた。

入院患者なのだろう。寝間着姿の、おそらくは二十代前半ほどの女性だった。彼女は、建物のすぐ近くにあるその木に向かい、二階の窓から目一杯に身を乗り出していた。

木と建物は、ほど近くにあるとは言え、それでも女子供が手を伸ばして届く距離ではない。だから、女性はもう、本当に目一杯。正に、窓から――窓枠から、身を乗り出していたのだ。

――あ、落ちる。

と。

……どうやら、間近に迫った危機感を感じた時、ヒトは身動きが取れなくなるものらしい。

ライター片手に間抜け面で頭上を見上げたまま――現実的な重みを持った危機感を、俺は全身で受け止めることになる。

そうして、俺――境守起陽（さかがみたつひ）と、彼女――緋蔭優（ひかげゆう）は出会う。

――それは、ひかげと、ひなたと、紙ヒコーキがもたらした、とある初夏の日の出来事だった。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［1－2］

何が起きたのか分からなかった。
……いや、起こったことは分かる。直前に眼にした信じられない光景を思えば、想像するに難くない。
分からないのは、何をどうしたらあんな有り得ない状況が生まれるのかということだ。

今俺に分かるのは、ただ一つだけ。
（……柔らかい）
何故だかこの上なく心地好いその感触だけ。
そして、男の黒い欲望を刺激する独特の甘い香り――
「――って、アホかっ！　とっとと退けっつーんだっ！」
「きゃん！」
なんて、思わずどきりとするような声を上げて、俺の上から離れる心地好い重み。
……言っておくが、名残惜しさなど感じていない。断じて。

「いたたたた……」
そんな声。
見れば、髪の長い女が一人、尻をさすりながら眉を寄せている。
どうやら、二階から落ちた衝撃よりも、俺に突き飛ばされた衝撃の方が応えたらしい。
――当然だ。落下の衝撃は、俺がこの身で受け止めたのだ。
「おいあんた！　どこの誰か知らないけどな、痛いのはこっちなんだよ！　頭ケガした人間の、その頭の上に落ちてくるなんて、いっ

たいどういう了見だ！？」
言うと、女は――女性は。黒眼勝ちの、くりっとした大きな瞳を俺に向けた。
美人だ――……と、思わなかった訳じゃない。
「うー……突き飛ばすなんてひどいよぉ～」
一瞬言葉に詰まった俺に、女性はまるで悪びれた風もなく、非難めいた眼をしてそんなことを宣った。
正直そりゃないだろってところだが、お陰で、色香に絆されそうになっていた自分を律することはできた。
「ひ、酷いのはどっちだ！？　あんたが今、目立ったケガもなく息災でいられるのは誰のお陰だ！？　俺が下敷きになってやったお陰だろうがっ！」
一瞬とはいえ、見惚れていた気恥ずかしさで語気が荒くなっていたが、女性は意に介した風もなく、きょとんと眼を丸くして、
「……？　……あ。あー、そっかそっか」
なんて言って、ぱんっ！　と手を打ち鳴らした。
「私ってば、キミの上に落ちちゃったんだ。で、キミのお陰でケガをせずに済んだ、と」
「……」
……どうやら、状況の把握はしてくれたらしい。
「……いや、ま、分かってくれて何よりだが。……それよりも、さ。分かったんなら言うことがあるだろ……？　迷惑かけた相手にはさ……」
正直、女性の相手をすることに疲れてきていたが、頭を抱えつつも言った。
すると、彼女はぱあっと花が咲いたように笑って――
「あ、そうだねっ！」

そう、笑って――

「――ありがとう！　キミのお陰で、おねーさん助かっちゃった！」

上機嫌で、そう言った。

……。

「……？　どうかした？　いー若いモンがそんなに渋い顔しちゃって。何か悩みごとでもあるのかな？　おねーさんに言ってみ言ってみ？」

どこまでも、脳天気な声で。

「ん？」

なんて、可愛らしく小首を傾げて見せる女。……何が可愛らしくだ。

「……いや、もう良い。好きなだけ窓から落ちてくれ。俺はもう行くから――」

うんざりして、そう腰を上げた時だった。

「――ゆーねーちゃーんっ！　だ、だいじょうぶっ！？　けがしてないっ……！？」

そんな、慌てふためいた子供の声が聞こえた。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［1－3］

声は、二階の窓から聞こえた。
他でもない。眼の前の女が落ちてきた窓だ。
見上げれば、背丈が余程低いのか、少年の首から上だけが建物の中から覗いている。
「あ！　あっくーん！　おねーちゃんなら大丈夫だよぉー！　すぐ戻るからねー！」
そう言って、元気に手を振って見せる女。

俺はと言えば、完全に立ち去るタイミングを失って、ぼけっと立ち尽くしていた。
そんな俺を横目に、
「さてっと！」
元気に言うと、女はすっくと立ち上がって、
「それじゃ――行こっか！」
――迷い無く、俺の手を掴んだ。
「……はい？」
残念ながら、仰っている意味が分かりません。
だが、そんな俺の胸中を知ってか知らずか、女は俺の手を掴んだまま早足で進み始めた。
普通なら、思い切り振り払ってやるところなのだが――……彼女の手の小ささ、そして柔らかさに、そうすることのできない自分が呪わしかった。

さっきの現場の丁度真上は、小児科病棟の廊下になっていた。

窓際でしょんぼりとしている少年の姿は、遠くからでもよく分かった。
「あっくーん、おまたせぇー！」
言いながら、女は小走りに少年の元へと駆けて行く。
俺はと言えば、ろくな文句も言えず、重い足取りで後に着いて行く。
……流されているな、とは思っていた。

「！　ゆーねーちゃんっ……！」
女の声に、少年はハッとして顔を上げる。
「だいじょうぶなの！？　ねえだいじょうぶなの！？」
しきりに、女の身を案じる少年。
女は、駆け寄ってくる彼の小さな身体を抱き留めて、にっこりと笑う。
「うん、もっちろん！　こー見えても、おねえちゃん運動神経いいんだから！　これっぽーっちも、怪我なんてしてないよっ！」
そんな言葉に、少年は心底ほっとしたように息を吐いて、あどけなく笑った。

それだけで、二人の間にどれだけの信頼関係があるのかは理解できた。
ただ、さすがに人間関係の方を断定するには材料が足りなかった――が、そもそも俺には関係のないことではあった。
だが、少年が『ゆう』と呼ぶその女にとっては、そうじゃなかったらしい。
「あ、えっとね、この子はあっくん。小児科に入院してる子でね、私のお友達だよー」
説明になっているんだかないんだか分からない説明だが――……いやなってないんだが、取り敢えず、実の兄弟ではないらしい。
「でねー……って、あれ？」

そして、この表情である。
疑問符を浮かべたいのはこちらの方なのだが。
「そー言えば私、キミの名前聞いてなかったねぇ！　あははっ」
「あはは」じゃねえ。と言うか、こっちもあんたの名前なんざ聞いてないんだが――……いや、まあどうでもいい。
「えと……キミ、名前は？」
正直、あまり答えたくはなかったが……答えないと承知しないんだろうな、多分。
「……境守（さかがみ）　起陽（たつひ）」
嘆息して答えると、女は少年に対するのと同じように、にっこりと嬉しそうに笑って、
「じゃあ、たっくんだねっ！」
……。
……もう、どうにでもしてください。

「……で？」
正直、もう口を開くのも億劫になっていたのだが、このメンツでは俺が進行役になるしかないようだった。
「この坊主とあんたと、あんたが二階から振ってきた因果関係はどこにあるんだ」
――あと、できれば俺がここにいる理由が知りたいのだが。
「あ、そうそう！」
そう言って、女はまた、ぱんっ！　と手を打ち鳴らした。
「あれをね、取ろうと思って――」
と、俺の心の声などちょんと無視して女が指差したのは、開け放たれた窓の外。
そこに見える、一本の木。言うまでもなく、俺が寄りかかっていたあの木だ。
だが、彼女が指差したのは木ではない。その中ほどの枝に引っかかった、白い物体だった。

眼を凝らしてみる。
「……何かの紙切れか……？」
いや――
「折り紙……紙ヒコーキ……か？」
――それは、素朴な形の紙ヒコーキだった。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［1－4］

入院生活と言うのは退屈なものだ。

子供の頃などは特に、自らがどれだけ重篤な状態かなどには無頓着だ。発作さえ出ていなければ、自由がないだけで、ただの休日と大差ない。

やることと言えば、テレビを見るか、本を読むか、何かの模型を作るか、いたずらでもするかぐらいしかない。

――あと、折り紙で紙ヒコーキ作って飛ばすとか。

つまりは、そう言うことなのだ。

「……何の気無しにヒコーキを飛ばしたら、窓が開いていたんだな？」

嘆息混じりに問うと、二人は調子を合わせたように、こくりと頷いた。

さらに言えば、それを無理矢理取ろうとしたが故に、この女は俺の上に降ってきたのだ。

「待っててね、今度こそおねーちゃんが取ってあげるから！」

合点がいって、やれやれと息を吐いていると、そんな懲りない声が聞こえた。

「ええー！？　またやるの！？」

虚を突かれたように叫んだ少年の気持ちもよく分かる。そりゃ無茶ってもんだ。

「当っ然！　だって、あれ、大切な物なんでしょ？」

「それは……そうだけど」

口ごもる少年。まあ、ああ言われては仕方ない。紙ヒコーキを取り戻したいのは、他でもない彼なのだ。

「だいじょーぶ！　おねーちゃんに任せて！　今度こそ取ってみせるから！」
「でも……危ないよー……」
むやみに張り切る女と、強く止めることのできない少年。
……いや、まあ、どうするのが最良かなんてことは、とっくに分かってる。
けど、俺は別にこいつらの関係者じゃないし、何の義理もないわけだ。むしろ、女の方には大迷惑を被ったわけで。
ここで、それじゃあさいならと立ち去っても、誰に文句を言われるでもないだろう。そもそも、勝手にやってくれと言う話だ。
いい年をして、それくらいの判断もできない方が悪い。
だから――俺が、今、この場でやるべきことなんてない……はずなんだが。
「よーし、それじゃおねーちゃん、頑張るからね！」
「ううー……」
いよいよ窓枠に手をかける女と、はらはらした様子でそれを見守る少年。
「……ちょっと待て」
――俺は、声をかけた。

「ほえ？」
きょとんとした顔で、女は振り返った。
少年も、驚いたような顔でこっちを見上げている。
嘆息して、俺は続けた。
「あんたがやったってまた落ちるだけだ、馬鹿。どう見たって、あんたに届く距離じゃないだろ、阿呆が」
そんな言葉に、女はしばし惚けたような顔をしていたが、やがて、フグのように頬を膨らませて言った。
「むっ……む～！　おねーさんに向かってばかとはなによぉ！　ば

かって言う方がばかなんだから！　たっくんのばかばか！」
……気にするべきはそこなのか？
怒りを通り越して呆れてしまうが、今はまあ、捨て置くべきだろう。
「……いいから、そこどけよ」
言うと、女はまたきょとんとして――
「俺が、取ってやるから」
そんな俺の言葉に、また花が咲いたように――……真昼の太陽のように、笑った。

女子供には困難な作業でも、男にとっては造作もない作業と言うのは世の中結構多い。
窓枠に腰掛けるようにして、片手でがっちりと窓枠をフック。後は身体を開くようにして目一杯手を伸ばしてやれば、目的の物を掴むのはそう難しいことではなかった。
「ほらよ」
そう言って、手の中の紙ヒコーキを手渡してやると、少年は屈託なく笑った。
「……ありがとうっ！　おにいちゃん！」
考えてみれば、この少年が俺に笑顔を向けたのは初めてだった。
……まあ、無理もないことだがな。普通、こんな俺に屈託なく話しかけてくる奴なんざ、今もすぐ眼の前にいる女くらいのもんだ。
――いや。……そう言えば、もう一人だけ、そんな物好きもいたっけな。
「？　……おにいちゃん？」
一瞬黙した俺に不安を感じたのか、少年の笑顔が曇る。
「あ、いや――」
思わず、はっとしてしまった。……まったく、俺らしくもない。
「……何でもねぇ。次からは気ぃつけろよ」

自嘲気味に苦笑して、それだけを告げた。
「うん！　きをつける！」
どこまでも屈託のない言葉。そして笑顔。
……調子が狂う。子供ってのは苦手だ。
「……」
言葉に窮したまま、窓枠から降りる俺。

――と、衝撃で少し屈んだ姿勢になった俺の丁度目線の辺りに、何か嫌なモノが映る。
にこにこと本当に嬉しそうに、楽しそうにする満面の笑顔。
……何より俺の調子を狂わせる、その笑顔。
太陽のような、笑顔。

――俺にとってそれは、余りにも……余りにも眩しすぎた。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［1－5］

出会ってからまだほんの僅かな時間だが、突拍子もないことをする女なのだな、と言うことはよく分かった。
――だが、さすがに今の状況は度し難い。

そこは、病院の屋上だった。
見上げれば、すっかり夏の顔を見せる、真昼の太陽が照りつけている。
正直鬱陶しいことこの上ないが、地上七階に位置するので風通しは悪くなく、少し強い風が熱を持った肌に心地よい。
据え付けられた物干し台に揺れる純白のシーツからは、洗濯後のさわやかな香りが漂っていて、居心地は悪くなかった。
そして、そんな場所のベンチに腰掛ける俺と女。
お礼のつもりなんだそうだが――何故か、手の上には、丸くて緑色の冷たい物体が乗っかっていた。

「……何だ、これは」
「えーっ！？　たっくんコレ知らないの！？」
もの凄く意外そうな声が帰ってきた。
……いや、まあ、コレが何であるかは分かっているんだがな。
「こんな美味しいもの知らないなんて可愛そうに……って、ちょっと待って？　もしかしてこれって、じぇねれーしょんぎゃっぷってやつなのかしら？　……よよよ、おねーさんも、もうそんな年なのね……」
なんて、泣き真似などして見せる女。
嘆息しつつも、俺は言った。

「……自己完結しているところ悪いがな。コレがメロンシャーベットだってことは分かってるし、一応は食ったことだってある。――つーか、そんなに上手いモンじゃないだろ、コレ。メロンっぽい色素と風味を加えただけの安っぽい氷菓子だし」

「まあっ！　なんてこと言うのこの子は！」

吐き捨てた俺に、女は柳眉を逆立てて身を乗り出した。

「これは素晴らしい食べ物なのよ！　サクサクとした食感に滑らかな舌触り、そしてほのかな甘みを湛えた優しいメロンフレーバー！

これだけのクオリティを実現しながら、価格は何と一個６０円！

――そして何よりこの外観よ！　ちっちゃなメロンを模したこの愛らしい姿！　和むじゃないっ！！」

……さいですか。

「まったく、これだから物が豊富な時代に生まれた子は……あむっ」

言いながら、一口シャーベットを口に含む女。

……つーか、あんただって物のない時代の生まれなんかじゃないだろ。

「……はぁ」

嘆息しつつも、俺は女に倣って、身体に悪そうな色のそれを一口含む。

記憶の通り、駄菓子じみた安っぽい甘みが舌の上に広がっていく。

……けれど、まあ。

……思っていたより、悪くはないかも知れない。

初夏の太陽が照らし、さわやかな風の吹く屋上で、時間にも捕らわれず、どこか懐かしい甘みに酔いしれる。

気のせいか、以前口にした時よりも、幾分旨いと感じられる。

――或いはそれは、隣にいる誰かの影響なのかも知れなかった。

……悪い人間ではないのだろう。多少不躾で強引だが、明朗快活で、人当たりの良さは疑いようがない。

子供に人気があろうことは疑いようがないし、それ以外にも受けが良いのだろう。俺の存在に配慮してか話しかけては来ないが、先ほどから、通るヒト通るヒト、彼女に笑顔で挨拶をして去っていく。

「……人気者みたいだな、あんた」

無意識に、そんな言葉が口をついて出ていた。

「ん？」

木製のへらを銜えたまま、きょとんとした眼を向ける女。

「……」

正直余計なことを言ってしまった。

だが、今更撤回するわけにも行かず、俺は押し黙った。

女はしばらく、俺の真意を測るようにこちらを見ていたが、やがてそっと微笑むと、穏やかな声で言った。

「う～ん……人気者かどうかは分からないけど、知り合いは多いかもね。ここでの暮らし、結構長いから」

「……？　長いって？」

ほとんど条件反射で尋ねていた。

女は一瞬、ばつが悪そうに苦笑して――

「ん、一年くらいかな。いやー、年を取ると病気の治りが遅くてねー、あはは」

――だが、そう言った時には、すでにあっけらかんとした笑顔に戻っていた。

少しだけ不審には思ったが、俺なんかが踏み込むべきことではないと思った。

だから、それ以上はもう何も言わなかった。

それに倣うように、女もしばらくは黙っていたが、少しして、遠慮がちに問うた。

「……たっくんは、人気者じゃないの？」

思わず吹き出しそうになった。

「そんな風に見えるかよ？　俺みてーなのに、好き好んで寄ってくるような奴はいねえって」
「そうなの？」
女は、心底意外そうに眼を丸くした。
「そうなのって……そこ聞き返すところか？　俺が嫌われモンなのは、話してれば分かるだろ」
「ええー？　そんなことないよー。むしろ、こうして話してるからこそ思うんだもん――たっくんは、優しい子だって」
その言葉に、嘘はないようだった。
……だからこそ、俺は自嘲的に笑った。
「……ねーよ、馬鹿。俺は、身体の芯から嫌われ者さ。そもそも、俺に話しかけてくる奴なんて――」
言いかけて、思わず言葉に詰まった。
……思い出してしまったから。
「……？　奴なんて？」
問われて、苦笑した。
「いや、何でもない」
吐き捨てるように言って、俺はシャーベットの最後の一口を口中に放り込んだ。
――脳裏には、一人の女の姿。
それは、こんな俺の側に、実に十年以上も居続ける、馬鹿な女。
……本当に、馬鹿な女の姿だった。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［2－1］

当たり前すぎて、ついつい忘れてしまうことと言うものがヒトにはある。
俺にとっては、正にあいつのことがそれだったわけで。
……だから、アパートの扉を開けた途端、まさかあんなことになるなんて思いもしなかったわけで。

――ぱんっ！

と言う音と共に、眼の前に火花が散った。
「ぶっ！？」
鼻面に走った衝撃に思わず声を上げる俺。
ぱさり、と足下に何かが落ちる気配がする。
が、それが何かを確認するよりも先に、
「――バカ起陽っ！！」
……そんな罵声が浴びせられた。
見れば、制服の上からエプロンを着けた女が、肩ほどに揃えた髪を揺らしながら、憤怒の形相で小さな拳を振るわせている。
……勿論、俺はそいつを知っていた。

「……ひなた」
「ひなた、じゃなあああああいっ！」
名を呼んだ俺に、そいつ――朝日奈（あさひな）ひなたは、怒号を上げた。
「あんたねえっ、こんな時間までいったいどこほっつき歩いてたの

よ！」
「こんな時間て……まだ7時くらいだろ。夕飯には丁度い――」
「そおおおおおゆう問題じゃなあああああああいっ！」
再びの怒号。
思わず耳を塞ぐ俺に、しかしひなたはお構いなしに続けた。
「あんたねえ、自分がしたこと分かってないの！？　学校へ電話しに行ったあたしの眼を盗んで、どこ行ってたのよ！？　いなくなったあんたの代わりに、薬待ちと会計待ちのあの長い時間っ！　一人で待ってたあたしに何か言うことはないの！？」
……なるほど。それは確かにキレるわな。

――けど、俺は。
「……あのなあひなた。俺は別に、病院に連れてってくれとも、付き合ってくれとも言った覚えはないんだぜ？　お前が勝手に俺をあそこまで引き摺ってったんだろうが。治療は受けてやったんだ、後はいつ消えようが俺の勝手のはずだぜ」
そう吐き捨てる俺に、ひなたは一瞬だけ憤怒の気配を強めたが、すぐに力なく肩を落とした。……小さな身体が、更に小さく見える。
「それは……そうだけど……でも、縫う傷だったんだよ？　病院には行かなきゃいけない傷だったってことじゃない」
さっきまでとは打って変わって、気弱そうに、遠慮がちに言うひなた。

それでも、俺は吐き捨てた。
「ガキじゃねえんだ、んなもん、どうしようもなきゃ自分で行くさ」
「それは……そうだけど……」
ひなたの言葉は、弱々しかった。
弱々しかったが――
「……でも、起陽の保険証、持ってるのあたしだよ？」
……弱々しくても、反撃は忘れないのがひなたと言う女だった。

そうだった。忌まわしいことに、俺は自分の保険証どころか、通帳すらも自分では管理していない――否。そうすることができないのだ。
「じゃあ返せよ、いい加減」
言ってはみるが、無駄なことはよく分かっている。
「それはだめよ。だって、おばさまによく頼まれてるもん、あたし。あんたに持たせといたらどうなるか分からないって。あたしも同感だし。……と言うか、起陽だって、納得の上のことじゃない。でなきゃ、今こーして一人暮らしなんてできてないわけだし」
うむ、全く以てその通りなのだが。
しかし、だからと言って保険証やら通帳やら、個人情報の固まりを他人に預けさせるか普通？　我が母親ながら、恐ろしいババアだ。
まったく、幼馴染みなんてろくなもんじゃねえ。

「……はあ」
嘆息しつつも、俺はそれ以上の反論を諦めて、部屋に上がった。
靴を脱いだ時、先ほど足下に落ちたのが薬袋であるのが分かったが、面倒なので拾わなかった。
……もっとも、背後でひなたが屈み込む気配がしたことから察するに、薬袋はあいつに拾われたようではある。
――それが無性に腹立たしかった。

「……いっそ、お袋んとこ行くか」
出所不明の苛立ちに、そんな意地の悪い冗談を止めることができなかった。
え？　と驚いたような声を上げるひなたに、俺はへらへらと続けた。
「そーすりゃ、このつまんねえ街とも、誰かさんともおさらばだし？　ホケンショ奪われたりしねーで済むし、保護者面した馬鹿女に

お節介焼かれねーで済むしなあ。うん、そうだなそれがいい、お前もそう思うだろ？」
顔も見ずに言ってやると、明らかに動揺した気配が背後から伝わってくる。
……何だかんだ言っても、今の生活を悪くないと思っているのだ、こいつは。
――それが分かっていながら、こんなことを言う俺は、最低なんだろうな。

「……冗談だよ、馬鹿。今更、あの他人の家に俺なんかが溶け込めるわけないだろ」
そう言うや、今度は背後の気配がぱっと明るくなった。……いや、或いは、明るくなるであろうことが初めから分かっていただけなのかも知れない。
……ほんと、幼馴染みなんてのはろくなもんじゃねえ。
「んなことより、夕飯はよ？」
胸中を誤魔化すために、吐き捨てるように問うた。
「あ、うん！」
ぶっきらぼうなだけの俺の言葉に、ひなたは嬉しそうな声を上げる。
「えーとね、レバニラだよー」
レバニラ。即ちレバー。
「……造血作用……か……？」
「うん。だって起陽、いっぱい血流してたじゃない」
呆れ気味の俺の言葉にも、けろっとして答えるひなた。

……まったく、何だってこいつはこう……。
本当に――
「……馬鹿な女」
嘆息混じりに呟いた言葉は、幸運にも本人の耳には届かなかった

らしい。
「ちょっと待っててね、今仕上げちゃうから！」
元気よく言うと、ひなたはそのまま、１Ｋの手狭なキッチンに消えて行く。

――が。
「それはそうと」
最後に一言、キッチンから顔を覗かせて言った。
「学校休んじゃったんだから、明日ちゃんと、自分で先生に事情話しなさいよね。一応、怪我が酷かったので休ませたって言ってあるけど、あたしのフォローにも限界があるんだから。分かった？」
言って、まるで母親のような仕草をするひなた。

――幼馴染みなんて、ろくなもんじゃねえ。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［2－2］

ひなたが何故、俺の側にいるのかは分からない。
物心ついた頃には隣にいて、それからずっと、同じようにそこにいる。
腐れ縁の幼馴染み。そう言ってしまえば話は早いが、俺としては、理解の及ばない怪現象も良いところだ。
何せ、俺だ。境守起陽なんて言うクソ野郎だ。実際の素行も評判も最悪のクズだ。

――ぶっちゃけてしまえば、だ。
そんな俺が曲がりなりにも人並みの学園生活を送れているのは、あいつが各所でフォローを入れているからなのだろうとは思う。
……望んだことなど一度もないが。
しかし、一部とはいえ、教師との関係が拗れないで済んでいるのは、ありがたいと言えばありがたかった。

放課後、生活指導室の安っぽいパイプ椅子は、俺の指定席となっている。
他でもなく、担任の熱心な女教諭が、頻繁に俺を連行してくれるからだ。
不穏な怪我をしてのご登校となったこの日も、当然の如く俺は拉致監禁の憂き目にあった。
「――じゃ、今日もまたお話しましょうか」
そう、笑顔で語りかけて来る教諭。
……まあ、慣れているとは言え、その笑顔が毎度不気味だった。
「……香月（かづき）センセよ、その笑顔怖いからやめてくれっていつも言っ

てるだろ」
「あら、じゃあ能面みたいな無表情でお話ししましょうか？」
そう言って、にこやかに微笑む彼女。
ほんとにやりそうで怖い。……まあ、敵わないのは分かってるのだが。

香月、と言うのが彼女の名前だった。
「……で？　また喧嘩ですか？」
慣れた様子で、そんな言葉を口にした。
「……」
即座に返せる言葉なんて無かった。
他の大人達と同様、責めてくれれば反論のしようもあった。
……けど、このヒトがけしてそうしないことを俺は知っていた。
香月センセは、やれやれと言うように嘆息した。
「弁解くらい、した方がいいですよ？　そんなことだから、良からぬ噂にどんどん尾ひれが付いていくんです」
「……街中のヤンキーを狩ろうとしてる、とかか？」
自分で言っていて、思わず鼻から笑いが漏れた。
「ガッコの連中も、笑わせてくれるぜ。ヤンキー狩りって……マジで言ってんのかよ？　陳腐すぎてギャグにもなりゃしねえ」
「そうですね。キミは、狩人なんかじゃない。自分から獲物を求めたり、何かを――誰かを害そうなんて、しませんよね」
言って、センセはにっこりと笑う。
「……」
何故だか笑顔が怖くて、また、俺は口を噤んだ。

「……何故、弁解をしないんですか？　話をしなければ、誰もキミを分かってはくれません。一人でいたい訳ではないのでしょう？」
その問いかけに、俺は自嘲的に笑った。
「……群れたいとは思わねえよ。むしろ、うるさいのが寄ってこな

くて清清する。それに、事実もあるからな。確かにケンカなんざ日常茶飯事だし、結末こそ知らねえが、実際俺が殴り倒した中には、病院送りになった奴もいたろうしな。警察沙汰になってないのが奇跡みたいな男だ。誰に何言われたって、どう思われたってしょうがねえ」

「……本当に？」

試すように、センセは言う。

「どう言う意味だよ」

険のある声を出してはみたが、柳に風なのは分かっている。

少しだけ真剣味の増した笑顔でセンセは言った。

「朝日奈さんのこと。彼女にもそんな風に思われたいの？」

「はあ！？　あいつのことなんざそれこそどうでもいい、愛想尽かしてどっか行ってくれるなら、それに越したことはねえさ」

……語気を荒げ、早口になっていた自分に、気づいていなかった訳じゃない。

それを分かっていたからか、香月センセも、さして表情を曇らせたりはしなかった。

「……あの子のこと、悪く言ってはだめですよ。あの子がいなかったら、キミは今ここにいなかったかもしれないんですから」

そんなことは分かっていた。

だから、それ以上はもう何も言わなかった。

「……学校は、楽しいところですよ」

沈黙した俺に、センセは改めるように言った。

「こんなに色々なヒトが一つところに集まって生活するなんて、社会に出たらそうそうあるものではないんですよ。せっかく色々なヒトがいるんですから、もっと話をしないと。勿体ないですよ？　境守君？」

そう言って、微笑む香月センセ。

その言葉の真意がどこにあるのか、俺には分からなかった。

分からなかったけれど――
「……ああ、そうなのかもな」
ぶっきらぼうに返したその言葉に、嘘はなかった。

センセは最後に優しく笑って、
「境守君、ヤマアラシみたいですね」
そんなことを言った。
意味が分からなかったが、尋ねても、センセは答えてくれそうにはなかった。
だから、俺も敢えて尋ねはしなかった。
「……生まれつき全身が棘に覆われていたら――」
無意識に漏れた呟き。
「そうしたら、楽だったのかな……？　もし、そうだったら、俺は――……」
そうだったら、俺は。
……その先の言葉は、続かなかった。

――それは、哀しいほどに、意味のない言葉だったから。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［2－3］

ケンカの時に気をつけるべきことは二つある。

一つは、必ず先手を取ること。ルールなどない路上の格闘に於いては、最初にダメージを与えた方が圧倒的に有利だからだ。

もう一つは、深い傷を負わないように立ち回ること。もう少し具体的に言うと、最低限、医者に掛からないで済むようにすること。

……今更確認するまでもないことだとは思うが、今回俺は、その二つ目を全うできなかったわけだが。

医者に掛かる傷を負うと、色々と面倒なことになる。

あのお節介馬鹿のこともそうだが、何より面倒なのが通院だ。縫合傷など負ってしまえば、抜糸や経過確認で何度も通院しなければならなくなる。

――まあ、そんなわけで。

煩わしい抜糸を済ませた午後のことである。

そこは中庭だった。

俺は芝生の生える木陰に腰を下ろし、何をするでもなく、ぼうっと夏の陽光に揺れる景色を見つめている。

遠くには、数日前に出会ったあの少年。紙ヒコーキを片手にはしゃいでいる。

隣には、同じく数日前に出会ったあの女。にこにこと楽しげに笑っている。

傍らには、小さなメロンを模したシャーベットの容器が三つ転がっている。

――どうしてこうなった。

カミサマなんてものがホントにいるのなら、そう問い詰めたい。
小一時間問い詰めたい。
しかし、本当にどうしてだったか。
……確か――そう。
あの少年が、外来近くの廊下で紙ヒコーキを飛ばしていたのだ。
それを俺が軽い気持ちで咎めて、そしたら何故か一緒に中庭へ出ることになり、気がついたら、メロンシャーベットの入った売店の袋を下げたあの女が笑顔で隣に立っていた。
何を言ってるのか分からねーと思うが言ってる俺が一番分からない。
まあとにかく、後は流れでシャーベットを三人ナカヨク貪り、現在に至ると言うわけだが。

「……しかし、マジでどっから現れたんだ」
「ん？」
ぽつりと漏らした俺の言葉に、女は小首を傾げて顔を向けた。
俺は、遠くの少年に視線を向けたまま続けた。
「あんた、何か変な能力でもあんのかよ。やなとこにいきなり現れやがって……」
それは深い意味など無い、愚痴の様なものだったが、女は思案するように顎へ指を当てて、
「……うーん、強いて言うなら、しあわせオーラを感じる能力かしらね？」
戯けるように、そんなことを言った。
「はあっ？」
思わず、俺らしくもない高い声が漏れた。
その台詞があまりにも陳腐過ぎたからか、本気で意味が分からなかった。

女は更に思案するように首をひねって、
「何て言うのかなあ、楽しい感じとか嬉しい感じとか、そう言う――優しい、穏やかな雰囲気かな？」
「それを嗅ぎつける能力があるってのかよ？　……変な虫みたいな奴だな」
それは心底呆れ果てた言葉だったが、女は脳天気に笑った。
「あはは、素敵な虫さんだねー」
「何勘違いしてるか知らねえが、俺が言ってるのは蝶みたいな可愛いもんじゃねえぞ。他人の幸せを目敏く見つけては根刮ぎ食い尽くしていく、大量発生したイナゴの如き害虫だ」
そう吐き捨ててやると、さすがのこの女も眉を寄せた。
「えー、それはちょっとひどいよー。私、ヒトのしあわせ食べちゃったりしないもーん」
「そうか？　百歩譲って、さっきの俺から『しあわせオーラ』とやらが出ていたとしても、今はそんなもん、すっかりどっかにいっちまったけどな、あんたがここに来たおかげで」
皮肉たっぷりに言ってやった。

だが、女は凹むどころか、
「そんなことないよ」
満面の笑みで、そんなことを言った。
予想外の反応に眼を白黒させていると、女は俺の鼻面にぴっと人差し指を当てて、確信を持った笑みで言った。
「今も出てるよ、しあわせオーラ」
「……ねーよ、馬鹿」
何と言うか、反論するのも馬鹿らしくなって、俺はそっぽを向いた。

――だけど、本当は。

「……なあ」
もしかしたらそれは、照れ隠しだったのかも知れない。
「あいつ、何であんなに紙ヒコーキが好きなんだ？」
顔も向けずに問うと、俺の胸中に気づいているのだか無いのだか、女はさして変わった様子もなく答えた。
「何でって……なんで？」
きょとんとした声を出す女。
俺は嘆息しつつも付け足した。
「……そりゃ、ヒトそれぞれだけどな。よくよく考えたら、俺がガキの頃ならともかく、今は入院してたって楽しいことは他にもあるだろ。ゲームするとかよ」
言うと、女は合点が行ったように笑って――……寂しそうな眼を、遠くの少年に向けた。
そうして、深く噛み締めるように、静かな声音で言った。
「あの子にとって、紙ヒコーキは……とても特別で、大切な――思い出、そのものだから」
――その言葉の意味を、俺は未だ知らなかった。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［２－４］

少年――斉藤敦（さいとうあつし）の産まれ育った家は、端的に言って、幸福と言えるものではなかった。

稼ぎの少なかった父親は、そんな自分を責めるかのように朝も昼もなく働き続け、また母親も、パートで家を空けることが多く、敦は肉親の手から離れて幼少を過ごさざるを得なかった。

しかしそれでも、家庭的な幸福と無縁であったわけではない。

たまには両親が休日を会わせて、家族三人水入らずで過ごす時間というものを作っていた。

どこかに出かけるような経済的余裕など元より無かったが、両親は創意工夫して、チープながらも家庭的な幸福に満たされた時間を、幼い我が子に与えていたのだ。

そんな中で、高価な玩具代わりに与えられた物が、何の変哲もない紙ヒコーキ。

それは、色取り取りの樹脂でできているわけでも、電動で空を駆けるわけでもなかったが、敦はそれをえらく気に入ったらしい。

そして、それに拍車をかけたのが、父親の死だ。

元より朝も昼も働き詰めで、貴重な休みすら敦のために使っていたのだ。眼に見えずとも、負債は徐々に彼の身を蝕んで、とうとう限界を迎えたのだろう。

それからは、当然、女手一つで敦を育てなくてはならなくなった母親はパートを増やすことになり、趣味の悪い神の悪戯か、敦も長期療養を余儀なくされる身の上となった。

見知らぬ白い空間に押し込められ、愛しい母親とは滅多に会うこ

ともできず、そんな中で、父親が遺してくれたその紙ヒコーキは、敦にとって、かけがえのない安らぎと幸福を与えてくれる、お守りのような物になった。

――即ちそれは、思い出、そのものだったのだ。

「ふぅん」

……ま、そんなことしか俺には言えないんだが。

「ふぅん……て、それだけー？　せっかく長々と説明してあげたのにー」

なんて、分かりやすい抗議の声を上げる女。

そりゃまあ、ごもっともではあるんだが。

「いや、ま、お疲れさんとは思うけどな。生憎と、他人のお涙ちょうだい話には興味ないんでな。正直、それで？　ってところだが」

オーバーアクションで、吐き捨てるように言ってやる。……自分でも、わざとらしかったかなとは思ったが。

しかし、あからさまにニヤニヤされるのは腹立たしい。

「ふ～ん……へ～……」

言いながら、ニヤニヤとこちらを見やる女。

「んだよ」

「べっつに～」

にやにや。

ふて腐れた声を出してやったが、女の態度は改まりそうになかった。

なかったから、俺は嘆息して腰を上げた。

「？　帰るの？」

驚いたように、女は声を上げる。

「……怒らせちゃった？」

ふいに、しょんぼりとした声を出す。……日頃脳天気なくせに、

こういう不意打ちは正直困る。と言うか、俺の身の回りにはこんな女しかいないのだろうか。
「別に。ただ、あんまり長居してもしょうがねえと思っただけだ」
言ったが、簡単に信じてはくれそうになかった。
だから、付け足した。
「……ま、気が向いたら……その、何だ。差し入れにでも……くるさ。あいつ――敦にも……そう言っといてくれよ」
それだけ告げて、返事も待たず、俺は女に背を向けた。
……煩わしかっただけだ。別に他意はない。

背後にかかる脳天気な女の声を振り切るように歩きながら、脳裏にはあの少年のことが浮かぶ。
斉藤敦。
他人の身の上話に興味がないのは本当だ。
ヒトのナカにどんな思惑やトラウマがあろうと、そんなモノ俺には関係がない。
そんなモノを一々気にしていたら、きりがない。一つ気にし始めたら、しがらみって奴は容赦なくヒトの身に絡みついて、奈落の底に引き摺り落とす。
だから、興味など無いし、大した意味など無い。
――ただ、一つだけ意味があったとすれば。
……それはまあ、あいつの本名を知ったことくらいか。

有史以来、ヒトって奴は眼の前の物の呼称がはっきりしないと気が済まないタチだし、場合によっては色々と不都合もある。物語の中の人物名とか。
……そう考えると、不都合の固まりのような奴が身近に居た気もしたが。
「――いや、どうでもいい」
吹っ切るように、誰にともなく漏らした言葉。

そう、どうでもいいさ。あいつの名前なんて、あいつのことなんて、知らなくてもいい。

――それは、無意識から出た警告だったのかもしれない。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［3－1］

折り紙を折ったこと、つまり折り紙遊びをしたことは、当然ある。最後に遊んだのは、確かまだ小学生の時分だ。

……隣にいたのは、ひなただったか。

思い出と呼べるほどのものではないが、まあそれなりに記憶には残っている。幼少時のキレイな記憶というのは、ある意味、俺にとっては貴重でもある。

最早うろ覚えだが、折り鶴や手裏剣、やっこさんに兜なんかのスタンダードな物は、おそらく一通り作ったことがあるはずだ。

――当然、紙ヒコーキも。

しかし、どうにも上手くいかない。昔はそれなりにやれていたはずなのだが、最初の一手順目、中心で二つに折ることすら上手くいかない。どうしてもズレてしまうのだ。

こう言う物は、1ミリのズレが最終的な完成度の高さに直接影響する。特に紙ヒコーキって奴は、飛行性能にに大きく関わってくるのだ。拘らないわけにはいかない。

「……何やってるの？」

幾度目かの折り直しをした頃、いつものエプロンを身につけたひなたが、キッチンから顔を覗かせて言った。

「見て分からないか」

作業の手は止めず、ぶっきらぼうに返す。

ひなたは驚いたような――むしろ懐疑的な表情を浮かべつつ、俺の隣に腰を下ろした。

「分かるけど、起陽と折り紙なんて、今となっては結びつかないじ

ゃない。……昔は良く二人で遊んだけどさ」
呆れているような、ともすれば馬鹿にしているような口調ではあったが、俺の手元を興味津々に覗き込んでくるひなた。
「寄るな暑苦しい。てか、やり辛いだろ」
ぴったりと肩を寄せてくるひなたを、こちらの肩でぐいと押し返してやったが、肩に掛かる緩やかな重みが離れる気配はなかった。
嘆息して、俺は手を止めた。

「俺が折り紙しちゃワリィのかよ」
……まあ、似合わないのは重々承知の上なのだが。
「悪くはないけど、どーゆー風の吹き回し？　起陽にしてみたら、こんなもの女子供の遊びだー、とでも言いそうなもんだけど。――まあ、女でも、この年になったらそうそうやる機会なんてないけど」
……遠回しに、馬鹿にされた様な気がした。
「……悪かったな、ガキでよ」
何だか馬鹿らしくなって、手にしていたそれをテーブルの上に放り投げた。
机上に散乱した幾つかの残骸を引っかけて、落下する作りかけのヒコーキ。
だがそれは、共に落ちた残骸と共に、慌てて後を追ったひなたによって、すぐに拾い上げられた。
「もー、乱暴なんだからー。そんなこと言ってないってば、拗ねないでよ～」
机上にヒコーキを戻しながら、困ったように眉根を寄せるひなた。
何だかあいつの顔が見れなくて、俺はそっぽを向いて頬杖を突く。

「拗ねてなんかねーよ」
……いや、ま。客観的に見て自分がどう言う態度なのかぐらい、分かってはいるんだが。
そんな俺の胸中などひなたは百も承知なのか、別に追求などして

こなかった。
「悪かったってば～、許してよ～、ね～？　馬鹿になんてしてないからあ。ほら、あたしも折り紙、嫌いじゃないしっ。だから一緒にあそぼ？　ね～、起陽ってば～」
そんな風に、甘えるような声を出して、ひなたは俺の袖を引く。
その感覚が、俺は嫌いではなかった。
「……わーったよ、うるせーな」
嘆息して言った俺に、ひなたは満足げに笑った。

「さてっと、それじゃあ何作ろっかっ――てゆうか、ヒコーキ作ってたの？」
テーブルの上の残骸を見つつ、ひなた。
「ああ。……どうにも、上手くいかねーけどな」
「そお？　起陽って元々そんな不器用じゃないし、けっこー上手くできてると思うけど」
自嘲的に漏らした俺に、ひなたは不思議そうな顔をする。
「それとも、何かどーしても妥協できない理由があるとか？」
その問いは、別段思惑もない、何気ない言葉だったのだろうが、俺は何だか、胸中を見透かされたようで面白くなかった。

だから、別の問いを返した。
「……お前、折り紙の得意な知り合いとかいねーの？」
「はえ？」
間の抜けた声が帰ってきた。完全に予想外だったのだろう。
まあ、予想外云々以前に、そんな知り合いが都合良くいるわけもない。問うだけ無駄なのは俺にも分かっていた。
――のだが。
「いるけど？」
ひなたはあっさりと言い放った。
「折り紙同好会の会長やってる子でねー――って言っても、会員そ

の子だけなんだけど――神山ちゃんて言う子。隣のクラスだから起陽は知らないかもね」
言ってみるもんだ。これ以上適役の人材が他にあろうか。
俺は驚きと共に、奇妙な高揚を感じていたが――
「紹介して欲しいの？」
そんな言葉に、思わず押し黙った。
……そうだ。ひなたの知り合いに折り紙の得意な奴がいたから、何だというのだ。
紹介して貰う？　――そんなことは不可能だ。ヒトを傷付け、ヒトを遠ざけてきた俺が、今更どの面下げてその輪の中に入って行けると言うのか。
「？　どしたの？」
ひなたは、屈託無く尋ねてくる。
だが、俺には答える言葉がなかった。
だから、俺は無言で、また、そっぽを向いた。
――そちらには誰もいないなんてこと、分かり切っていたのに。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［3－2］

「――あー、たっくーん！　やっほー！」
病院の正門を潜った瞬間、脳天から突き出るような声が俺の耳を打った。
見れば、入り口近くのタクシー乗り場に、一人の女の姿。
――言うまでもなく、お馴染みのあの女だ。
人目も気にせず、ぶんぶんと手を振る女に嘆息しつつも、俺は歩み寄った。
「……何だ？　どっか行ってた……ってわけでもなさそうだな」
女は、いつもの寝間着姿。とてもタクシーでどこかへ行く格好とは思えなかった。
「あ、うん。さっきまで友達が来ててねー、その見送りに来てたんだー」
そう言って、嬉しそうに笑う女。なるほど。それならば、寝間着姿のままこんなところに居るのも納得が行く。
……まあ、どうでもいいんだが。
俺は適当に相づちを打って、入り口へと向かう。……当たり前のように俺の隣に並んでくる女については、ノーコメントでお願いしたい。

院内には、いつもの騒がしさはなかった。
「世間的には日曜日だからね。……静かで驚いた？」
俺の僅かな戸惑いを察したのか、俺の顔を覗き込むようにして、女は言った。
俺は嘆息して、
「……別に。俺も、この空気を知らない訳じゃない。ただ……久し

ぶりだったからな。少し感傷的になっただけさ」
少しだけ戯けるように言った。
持って回った言い回しに女はきょとんとしていたが、俺はそれ以上何も言わなかった。
……喋り過ぎだと思った。
だってそうだろう？　こんな静かな落ち着いた場所で、やかましく騒ぎ立てるなど情緒がないってもんだ。
ついでに言えば、常識ってもんもない。病院てのは、日頃の喧噪があろうと無かろうと、騒がしくして良い場所じゃない。
――もちろん、紙ヒコーキを飛ばす場所でもないのだが。

「あー、あっくんだー」
俺の視線を追って、女がその名を口にした。
「……ったく、あいつまた……」
うんざりして、俺は嘆息した。
俺達の行く先、少し離れた廊下に敦の姿があった。……紙ヒコーキを飛ばしながら、廊下を行ったり来たりしている。
ヒトが柄にもなく注意してやったってのに、何にも分かってなかったらしい。まあ、言っても聞かねえのが子供って奴なのかも知れないが。
「しょうがない子だねえ、せっかくたっくんが注意してくれたのに」
自分の気持ちが代弁されたのを合図に、俺は再び進み始める。

だが、声をかけようかと思った頃、敦の姿はふいに俺の視界からいなくなった。
と言っても、からくりは簡単だ。廊下から少しくぼんだ位置にあるエレベーターホールに、紙ヒコーキを追って行っただけだ。
俺も女もそんなことは承知の上だったから、気にもとめずに歩を進める。
そんな俺たちの耳に、ふいなチャイム音。何の変哲もない、耳慣

れた音だ。どうやら、エレベーターが到着したらしい。
休診日とは言え、ヒトの往来がない訳じゃない。むしろ、入院患者の見舞いなどで、外来患者以外の来客は増える傾向にあるだろう。事実、病院に来て早々、女と出会ってしまったのもそのせいだと言える。
だから、それもまた、別段気にすることではなかった。
ただ一つ、気になることがあったとすれば、それは――

《んだあ？　このガキィ》

――聞こえてきた声が、酷く不快だったと言うことだ。

《こいつが欲しいんじゃねーの？》
《ああ、これお前のなの？　へぇ》

声の主は二人だった。
へらへらとした口調。他人を敬う気など欠片ほども感じさせない声。そいつらがどんな人間であるのかは想像に難くなかった。
だが、そこで――眼に映らないその場所で、一体何が起きているのか、俺たちには分からなかった。

《そりゃ残念、コレじゃもう飛ばせねえなあ、ほれほれ》
《ぎゃはは、ひっでー》

この場所には到底似つかわしくない、騒々しい、下卑た声が癇に障る。
やがてその異端者は、耐え難い悪臭を放ったまま、俺達の前に姿を見せる。
謙虚さなど皆無な傲岸不遜の歩み。
俺は道を譲る気などさらさら無かったが、女は違った。彼女は俺

より一歩下がって、身体半分ほど、横に身をずらした。
だが、避け幅が足りなかったのか。
「きゃっ……」
小さい悲鳴を漏らして、女はよろめいた。
――理由など分からない。それは、ほとんど条件反射だった。
「おい待――！」
待てよ、と。怒りに任せたその言葉。
――だが、それは最後まで続かなかった。
怒号を上げかけた俺の袖を、何かが引いたからだ。
他でもない。女が、押し退けられた張本人である女が、俺の袖を掴んでいた。
「……だめ。だめだよ、たっくん……」
その言葉は、さして大きな声ではなかったし、袖を掴む力も強くはなかった。
――けれど、逆らえなかった。
その理由も分からないまま、
「今は、あっくんの方が心配だよ。何かあったのかもしれない」
そんな言葉に従った。
俺自身、嫌な予感は感じていた。けして無事では済まない、不穏な空気。清浄な白の世界を汚す、不快な黒い染み。
軽い焦燥を覚えながらも、俺達はそこに向かう。あの無邪気な笑顔が今もそこにあることを信じながら。
――しかし。
ある意味、予想通りと言うべきなのか。
そこに、紙ヒコーキを手にはしゃぐ、あの無邪気な少年の姿はなかった。

【くづり】

［3－3］

腑に落ちないことがあった。
「……何故、止めた？」
誰もいない屋上。黄昏時の朱色を浴びながら、俺は問うた。
「？　何が？」
きょとんとして、女は言った。
俺は一度嘆息して、続けた。
「あいつらがあんたにぶつかった時、呼び止めようとした俺を止めたろうが。意味わかんねーぞ。あん時のあんたに落ち度はなかったんだ、呼び止めて文句の一つも言ってやるのが筋だろうが」
そんな、憤りを込めた俺の言葉に、女は優しく苦笑した。
「だから、ダメだってば」
「何が」
「私だって馬鹿じゃないんだよー？　あの時たっくん止めてなかったら、絶対ケンカになってたでしょ？　病院で殴り合いのケンカなんて、それこそおねーさん怒っちゃうんだから」
「なっ、んなこと――」
なかった、とは言えなかった。

言葉を飲み込んで、俺は自嘲気味に嘆息した。
「……確かにな。あいつらみてえな奴らと俺じゃ、喧嘩にならないわけがねえ。……あんたの行動は、間違っちゃいなかったんだろうな」
病院で殴り合いなんて、みっともないどころの話じゃない。
……それに。
「あっくんのことも……あったからね」

……そう。あんなあいつの前で、無様な喧嘩なんざするわけにはいかなかった。

あの時、ヒコーキを追ってエレベーターホールに消えた敦。

直後に到着したエレベーター。

おそらく、ヒコーキはエレベーターのすぐ前に落ちていたのだろう。

俺達がその姿を見た時、ヒコーキは酷い有様だった。ただ足形が付くに留まらず、ぼろぼろの紙くずのようだった。

……何故そんな状態になったのかは、想像に難くない。どうすれば、踏みつけた後、どう足を動かせばそうなるのかなんて、子供でも分かるだろう。

――それが、あからさまな故意であると言うことも。

犯人は分かっていた。俺達とすれ違った、いかにも軽そうな男の二人連れ。華奢な女を突き飛ばしても、気づきもせずに笑っていられるその無神経さが、何よりの証拠。

やはり、女の制止を振り切ってでも、あいつらを呼び止めておくべきだったのかもしれない、と思う。そうしたら、少なくとも俺は、こんなにも腹立たしい思いをせずに済んだ。

――いや。だからこそ、女は俺を止めたのか。あの時点で既に、敦と紙ヒコーキに何があったのかなんて察していたのだ。溢れ出す激情を抑えられたはずなど無い。

……血が、流れたと思う。この清浄な白い世界を汚す、赤い色が。

必死で慰めようとする女。何を言うべきかも分からなかった俺。

――『だいじょうぶ、だよ……ぼく、だいじょうぶ、だから』

そう言って笑った、あいつの顔が忘れられない。

――苦々しい。こんな軟弱な感情、疾うの昔に忘れ去ったはずなのに。

……らしくない。鬱陶しい靄を吹っ切るように、俺は頭を振った。

何を思っているのか、手すりに身を預けて、じっと遠くの夕陽を眺めている女。

その隣に、俺は手すりへ背を預けるようにして並んだ。

「……？　なに、それ？」

女の問い。それは、掲げられた俺の手に引っかかった物に対して。

「渡せる雰囲気でもなかったからな……あんたに預けておくよ」

それは、小さなビニール袋。何の変哲もない、どこにでもある袋。

……中には、何の変哲もない、子供用の折り紙セットが一つ、入っている。

女は一瞬驚いたような顔をして、だがすぐに笑顔になり――しかし、最後は寂しげな顔になった。

「……本当なら、とても素敵なことだったのに。……残念、だね。……ほんとに、残念……だよ……」

いい年をして、泣きそうな顔をするな。

そう言ってやりたかった。

……けど、言葉なんて出てきやしなかった。

何故だか息苦しくて、胸が痛くて、逃げるように俺は女から離れた。

「たっくん……？」

不安そうに、女が俺を呼ぶ。

俺は振り返らずに、軽く手を挙げた。

「今日は帰る。これ以上ここにいる理由もないからな」

できるだけ無感情に、できるだけいつもの俺のように吐き捨てる

と、女は少しだけ寂しそうな声で、
「そっか……じゃあ――またね、たっくん」
そう言った。
その声が、余りにも弱々しかったからか。
「……ああ、またな」
そんな言葉を、無意識に返していた。

――腑に落ちない。何もかもが。俺に柔らかな言葉を吐かせる感情。どうしようもない激情を抱かせる苛立ち。
そんなものは知らない。そんな俺は知らない。……そんなもの、忘れたはずだ。……そんな俺は、捨てたはずだ。
腑に落ちない。これは何だ？　俺はどうしたんだ？　俺は何がしたかった？　どうしたかった？
――否。俺は何がしたい。どうしたいんだ。

誰か、答えを教えてくれ。
――進むべき路を、照らしてくれ。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［３－４］

俺の身体を心配する者がいる。
俺の悪評を危惧する者がいる。
俺の行動を憂う者がいる。
――それらはきっと、正しいことなのだろう。間違っているのは、おそらくは俺の方なのだ。
彼女たちを善とするならば、俺は悪。
善とは尊崇されるものであり、悪とは糾弾されるべきものだ。
――勧善懲悪。
有史以来、洋の東西を問わず、ヒトの親はずっとそれを己が子に教え説いてきた。それはヒトにとって、永劫普遍、唯一無二の犯さざるべきルールなのだ。

だから、俺はヒトの群れの中では生きられない。俺は悪だから。奇異の眼を向けられ、嘲笑され、焼けた鉄の道を独り歩むしかない。
……それを、辛いと思わないわけではない。寂しい……と、思わないわけではない。
けれど、俺には分からないのだ。現実には何が善で、何が悪なのか。本当に尊崇されるのは何で、糾弾されるべきは何なのか。
守るべきは何なのか。捨てるべきは何なのか。

……俺が拳を振るえば、傷つく者がいる。
心配する者がいる。
危惧する者がいる。
……憂う者がいる。
それは、忌避すべきものなのだ。ヒトのルールに則るのなら。……

…己の本心に従うのなら。
だが、そのために犠牲にしなければならないモノがあるとしたらどうなのか。それが、絶対に譲れない、譲ってはならないモノだったならどうなのか。
――どちらを守り、どちらを捨てるのが正しいのか。
……俺にはそれが、分からない。

光のない暗闇の路だ。陽の差さない、陰の世界だ。進むべき方向も、進むべき距離も分からない。……何も分からない。
だが、だからと言って、その場に留まり続けているわけにはいかないのだ。手探りにでも進まねば、その場で腐って行くだけだ。
……そうして、藻掻いて、藻掻いて。
どこに向かっているのか、進む先に何が待っているのかなど分からない。
それでも、俺は、進み続けるしかない。
例え、同じ路を向こうから進んで来る者がいようとも、俺は止まらない。

――絶対に路など譲らない。

誰かみたいに、こそこそと路を空けたあげく、突き飛ばされるなんてのは御免だ。そんな馬鹿げた目に何て遭ってたまるものか。
行く手を阻むモノは、何であろうと誰であろうと、全て蹴散らしてやる。俺の歩みを、俺の願いを阻むモノは、全て敵であり、悪なのだから。

……こんな俺を見たら、きっと、彼女たちは悲しむのだろう。
それでも、俺にはそうするしかない。俺の中の激情を晴らすためにも――踏みにじられた尊い記憶を、取り戻すためにも。
「さあ、行くぞ、境守起陽。――鬼退治の時間だ」

……長い言い訳の後、俺は独り、暗闇の中でそう呟いた。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［4－1］

俺は、良くある探偵モノに出てくる、高校生探偵なんかじゃない。じっちゃんの名にかけるわけでもなければ、身体は子供で頭脳は大人ってわけでもないからだ。

――と言うのは、まあ、冗談だが。

しかし、常識外れな推理力や捜査能力があるわけじゃないってのは、本当だ。

だから、名も知らぬ他人を一から捜し出すなんてことは本来不可能だし、あまりにも身の程知らずでおこがましい所行だ。

――本来なら。

探し出すべき相手が、見るからに頭の悪そうな分かりやすい連中だったことと、出会ったのが病院であったのは幸いだった。

奴らが見舞客であったのは間違いない。

そしておそらくは、見舞った相手も奴らとそう変わらない性質の人間だろう。

そんな人間が最も世話になる確率の高い科はどこだと思う？

言わずもがな、外科だ。ああ言う馬鹿は、周囲と同じくらい自らも省みないが故に、生傷の絶えない奴が少なくない――言っていて耳が痛いが。

ともかくも、俺は外科病棟のナースステーションで、それらしい入院患者や見舞客に心当たりがないかを尋ねた。まあ、探偵モノ風に言うところの、キキコミってやつだな。

多少不審ではあったかも知れないが、奴らはナース達の間でも有名だったのか、拍子抜けするくらいあっさりと、ターゲットは見つ

かった。
――勿論、この場合の有名は、悪い意味での話だが。
聞けば、配慮に欠けた大声での談笑や、病室を初めとした喫煙所外で喫煙に、ナースへの迷惑行為と枚挙に暇がなかった。
いつの間にか愚痴に付き合わされるような形になっていたのは苦痛だったが、まあ、そのくらいはご愛敬。何よりも強力な免罪符を手に入れた。こんだけのワルモノだ。多少の無茶をしても、俺が責められることはないだろう。

病室が見つかれば、やるべきことは一つだけだ。
俺は、腰の後ろ、シャツの裾で隠したそこにある獲物を手に、件の病室に踏み込んだ。
突然の闖入者に狼狽する入院患者。予想通りの男だった。
見れば、男は足を骨折しているらしく、ベッドの上に投げ出された足は石膏に覆われていた。
そんな美味しいポイントを見せびらかされたら、すべきことは一つ。
手の中の獲物を、迷い無く最上段から振り下ろす。
響く轟音。砕ける石膏。無様な悲鳴。――事前に人気のないことを確認しておかなかったら、ちょっと面倒臭いことになっていたかも知れない。
俺は悪びれた風も見せず、手の中の獲物をプラプラとこれ見よがしに強調しながら、用件を伝える。つまり、奴らの所在とその他一切の情報について。
素直には教えてくれなかったが、懇切丁寧に、二度三度と問い直してやったら、嬉し涙を流しながら、洗いざらいゲロってくれたよ。
――まあ、そんなわけで。特に苦労した訳ではないんだがね。一言だけは、言っておく。
「……ったく。めんどくせえことさせやがって、カスが」

吐き捨てると、薄汚れた闇の中に蹲った影が、もぞもぞと虫のように蠢いた。
「う……うぅ……」
あらら。虫のくせに、いっぱしにヒトみてえなうめき声を上げやがりますよ。
――ま、カテゴリー的には人類なんだろうけどな。
「とっとと起きろよ、わざわざ寝こけねえように手加減してやったんだからよ」
言ってやると、そいつは真っ赤な鮮血の滴る頭蓋を支えながら、憎々しげに俺を見上げた。
「くっ……そっ……何だってんだ、いきなりっ……！」
そんな呟きを漏らす男を、俺は冷め切った侮蔑的な眼で見下ろしていた。

「不幸ってのは、いつだっていきなりやってくるもんだろ。……あいつだって、次の瞬間にてめえみてえな汚え不幸が扉の向こうからやってくるなんて、思いもしなかったろうよ」
「な……に……言って……？」
暗い声で言う俺に、男は尻餅を突いたまま怯えたように問う。
俺は、自嘲的に薄く笑う。
「……さあ？　何言ってんだろうな、俺は。てめえでもよく分かんねえよ」
首をすくめて言ってやる。
と、男は馬鹿にされたとでも思ったのか、少しだけ眼付きを鋭くして問うた。
「テメェ……いったい何もんだっ……！？」
そんな台詞に、思わず吹き出してしまう。こんなお約束で、ありきたりで、期待通りの台詞が他にあろうか。
「はっ、ははははっ……！　ナニモノ、何者かあっ……そうだなあ、

そりゃ気になるよなあ。うーん、何だろう、そうだなあ……」
笑い混じりに言いながら、俺は手の中のずしりと重い銀の閃きを見た。……赤いものが、微かに付着している。
それを頭上に振り上げながら、俺は続けた。
「――少なくとも、正義の味方とは言えねえよな」
言いながら、己の中に湧き起こる暗い高揚に任せ、手を振り下ろす。
暗い路地裏に響く轟音。飛び散る石片。
蹲る男は、怯えたように頭を庇っている。
俺は、自嘲的に嗤った。
「……正義なんて知らねえ。俺はただ――眼の前の路を、進むだけだ」

【つづく】

［4－2］

辺りは夜の闇に包まれている。
うらぶれた路地裏だ。街灯などまばらで、他に人通りはなかった。

喧嘩をするのに、人目を気にしたことはあまりない。
喧嘩なんてものは、ヒトの感情の高ぶりによって自然と引き起こされるものだ。気がついた時には、自分か相手、どちらかが血を流している。そんなもの。
――だから、と言うのもある。刑事事件に発展せずに済んでいるのは。
人目があれば、大抵の人間は無茶をしないし、無茶をする前に某かの横槍が入る。そうして結局は、決着が付く前に三々五々、方々に散って行くことになるのだ。

だから、この時間、この場所を選んだ。
別に、事件になるような無茶をしたかったわけではない。
けれど、余計な横槍を入れられるのは避けたかった。
これは、ただ無軌道な暴力を振るうだけが目的ではなかったから。
先にあったのは抑えられざる激情だったとしても、果たさねばならないことがあったから。

……暴力に目的を持つなんてのは、全く以て俺らしくもない。
こんなもんは、どこまで行っても肯定されるべきモノなんかじゃねえんだ。目的を持つなんざ、愚かしくて、おこがましい。んなことは分かってる。
だから――だから。

そんなもんは鼻で笑って、捨てて、忘れて、自ら踏みつけにしてきた。
これはただの暴力だ。それが真理で、それでいい。認められようなんざ思わねえし、そもそも、認められちゃいけねえもんだ。
自分が進むために、他人を押し退ける行為に言い訳なんかできない。それは善じゃあない。正しいことじゃない。
……だから、俺は悪党で良かった。ヒトに後ろ指を指され、忌み嫌われるだけの奴で良かった。理由なんかいらない。ただの暴力で良かった。それで良かったのに。
――身体は、止まらなかった。

「――こいつに見覚えがあるだろ？」
獲物とは逆の手に持った白いモノを見せながら、俺は地面に蹲る虫けら――……自らの同類に、問うた。
「ハアッ！？　しるかよっ！」
考える素振りも見せず、虫は答える。
軽く、一蹴り。
「ぶはっ！」
無様な悲鳴。見れば、虫は鼻血を流している。
笑いそうになった。
「見た目通りのミニマム脳味噌な野郎だな、少しは考えろよ」
笑いを堪えながら、俺は続けた。

「日曜日だ。病院のエレベーターホール。入院患者のガキの前で、何をした？」
俺の手の中にあったのは、他でもなく紙ヒコーキ。勿論、あれと同じものじゃないが。
「……ああ、アレか」
ようやく思い出したのか、つまらなそうに虫は吐き捨てた。
目障りだったので、踏みつけた。

「ぐぼっ……！　ぐえ……っ……」
詰まったホースみたいな音を立てながら、転がり回る虫。
なんか、そう言う玩具みたいだな、と思った。
「そうだな。お前らにとってはその程度のことだ。俺だって、よく知らねえガキのことなんざ道端の小石程度にしか思わねえし、お前らにとって、その小石がどうしても邪魔だったってんなら、それを退けることを責める気はねえよ。――けどな」
今一度、足を振り上げる。
「げはっ……！」
吐瀉物と血をまき散らしながら、虫は地面を転がり回る。

俺は歩み寄りながら続けた。
「てめえで避けられるもんなら、避けた方がいいことだってあるんだぜ？　一見ちっちゃな小石に見えても、地面の中には巨大な岩が埋まってるかも知れねえ。小石は蹴散らせても、岩は無理だろ？　お仲間みてえに、足が折れるぜ？　なあ」
もう一蹴り。
「ぶあっ！　……っ……くっ、もっ、やめっ……やめてっ……」
血反吐をまき散らしながら、懇願するような眼で虫は呻いた。
……それに、少しだけ頭が冷えた。

「……止めてやってもいい。俺の言う通りにするならな」
言うと、虫は続きを求めるように怯えた眼をした。
軽く嘆息して、俺は続けた。
「――もう、あの病院には近づくな。金輪際、二度とだ。……あそこは、お前みたいな汚え染みが足を踏み入れていい場所じゃない」
自分でも驚くくらい、迷い無く、そんな言葉がすらすらと出てきた。
けれど、虫には今ひとつ、ヒトの言語が理解できていないようだった。

だから、付け足した。
「別に考えなくたっていいんだよ。お前は――お前らは。ただあの場所に近づかなければいい。それだけだ。……でなければ、また、今日と同じ目に合うことになる。お前も……お前の仲間も、な」
ぎろり、と。最後に一つ、睨み付けた。
「――！！　ひぃっ……！」
頼るべき仲間すらも最早無事ではない。その事実が決定的な畏怖となったのか、程なくして虫は――男は。ぼろぼろの身体を引き摺りながら、薄汚れた闇の中に消えた。

――嘆息する。
疲労感が、どっと押し寄せた。
身体が重い。何も考えたくない。
足に残る、あいつを蹴り上げ、踏みつけた感触が気持ち悪かった。
……だけど。考えないわけにはいかないのだ。
「――分かっているさ」
誰にともなく、俺は呟いた。
分かってる。こんなことをしても、誰も救われない。精々、俺の気が晴れる程度。……それすら、一瞬でしかない。
ならば、どうすればいいのか。何をすればいいのか。

――今の俺に考えられたのは、一つだけだった。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［4－3］

「ねー、まだー？」
部屋に集まったガキの一人が、痺れを切らしてそう漏らした。
それに触発されて、その他のガキ共も口々に不平を露わにする。
「もーまちくたびれちゃったよー」
「さきにはじめちゃおうよー」
「てゆーかボク、へやでゲームしてたいんだけどー」
「――ええいっ！　うるせえぞこのクソガキ共っ！　まだ何分も待ってねえだろうがっ！　大人しくしてやがれこの野郎っ！」
てめー勝手なガキ共の言い分に、俺は語気荒く叫んだ。
ガキ共は瞬間、怯んだように押し黙ったが――しかし、それも一瞬だけのこと。
何故なら。
「こーらバカ起陽っ！　大人しくするのはあんたの方でしょーが！」
そう言った女の容赦ない一撃に、俺の威勢は続かなかった。

「あだっ！」
後頭部をはたかれた衝撃に、思わず間抜けな声が漏れる。
頭を抱えたまま振り返れば、そこには、嫌と言うほど見知った顔。
「ひなたっ！　てめっ、いきなり何しやがるっ！？」
目一杯眼を吊り上げて抗議してやったが、女――ひなたは、それ以上の剣幕で、俺の反論を許さなかった。
「何しやがる、じゃねーわよっ！　いい年して、なに子供にマジギレしてんの！　大人げないにもほどがあるわよ！　少しは自重しなさいっ、このバカ起陽っ！」
そんな発言に、一瞬は静かになったガキ共も、俺の背後でひそひ

そと囁き合う。
「ばかたつひだって」
「ばかたつひらしいね」
「ばかたつひなんだー」
「うるせーぞクソガキ共っ！」
即座に振り返って言ってやったが――
「だ・か・らっ！　いいかげんにしなさいっ！」
そう言ったひなたに耳を引っ張られて、それ以上言葉を続けることはできなかった。

……しかし。まあ、確かに。十歳近く下のガキ共相手に、ムキになるのもアホらしい。
「いっててて！　わーかった！　分かったからっ、耳を放せっ！　放してくれ、放して下さいお願いしますっ！」
涙ながらに訴えると、ひなたはようやく手を放す。
……言っとくが、比喩じゃないぞ。本気で泣くくらい痛いんだ、こいつの攻撃は。
痛む耳を押さえつつ、何とか体勢を立て直す俺に、ひなたは嘆息混じりに言った。
「あんたねえ、自分でこんなこと企画しといて、ちょっと一人ではしゃぎ過ぎ。少しは大人しくしなさいよ――付き合ってくれた神山ちゃんにも、悪いでしょ」
そんな言葉に促されて見てみれば、ひなたの隣で、ばつが悪そうに苦笑する少女が一人。
――神山美月。いつぞやのひなたとの会話で名前の出た、隣のクラスの女生徒だ。
彼女をこんな場所に引っ張り出したのは、他でもなくこの俺だ。本来なら、彼女を気遣ってやるのは、ひなたではなく、俺の仕事に他ならなかった。

「あー……その、すまん、神山。……ガッコまで、早引けさせちまったってのに」
素直に頭を垂れた俺に、少女――神山は、驚いたようにぶんぶんと手を振った。
「あっ、謝らないで！　別に気にしてないからっ！　香月先生にも、正式な校外活動として認めて貰ってるんだし、それに――……とっても素敵なことだなって、思うから」
そう言って、神山は優しく微笑んだ。
……考えられないことだな、と思った。同じガッコの奴から、この俺が優しく微笑みかけられている。
それは酷く烏滸がましくて、滑稽で――むず痒い感覚だった。
それが何だか気持ち悪くて、俺は誤魔化すように吐き捨てた。
「……そんな、いいもんじゃねえって。俺は、馬鹿だからな。……単に、これくらしか、思いつかなかったってだけの話さ」

俺が、あいつ――敦のために、できること。
――そんなもの、端からありはしなかった。俺は結局、暴力を振るい、ヒトを傷付けることしか能のない、ただの愚か者だ。誰かを救う術なんて知らなかった。
……だから、ひなたに、神山に、泣きついたのだ。
それはどこまでも情けなくて、格好悪くて、俺らしくもない。誇れることでもなければ、素敵だなんて、言ってもらえるようなことでもない。
そこは、小児科病棟の子供達のため、院内に設けられたレクリエーションルーム。
可愛らしいデザインのソファには、幾人かの子供達。
彼らの囲むテーブルの上には、幾つもの折り紙セットと、ハサミやノリなど、凡そ「それ」を行うために必要な道具が、一式揃えられていた。
これからここで何が行われるのか――そんなこと、今更確認する

までもない。

「……喜んでくれるといいね」

誰かが優しく呟いた時、部屋の扉が静かに開かれた。

そこには、相変わらずの笑顔を浮かべるあの女と――今日の主賓である少年が、きょとんとした顔で立っていた。

【つづく】

《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》

［４－４］

最初から、あいつの思い出を取り戻してやれるなんてことは思ってなかった。

それは、言葉にするのも、心に描くことすら烏滸がましいことだ。不当な暴力によって失われてしまった思い出は、この先、二度と元通りになることはないのだろう。

ならば、俺には、ヒトには、いったい何がしてやれるのか。

それはきっと、誤魔化してやることくらいなのだ。悲しみを。寂しさを。

誤魔化しで、何が変わるのかなんて分からない。それは、分の悪い賭だった。確証など何もなかったし、賭に勝った時のあいつの姿も、己の姿も、想像することはできなかった。

だからそれは、ただの自己満足だったのかも知れない。自分の中に湧き起こる無力感、やり切れなさを、何とかして誤魔化したかったのだ。

自分はこれだけやったのだ、だから誰も俺を責めないでくれ――そう、訴えたかっただけなのだ。

……だから、あいつの笑顔を期待した訳じゃない。想像した訳じゃない。

――それでも。

ひなたや神山、他の子供達に――あの女。その輪の中で、楽しげに笑うあいつの笑顔は、暗い日陰に沈む俺のココロを、確かに慰めてくれた。

俺の脳裏に焼き付いた、寂しげに笑うあいつの顔を、一時、忘れさせてくれた。

――願わくは。あいつ自身も、また。あんな笑い方など、忘れてくれれば、と。
初夏の眩しい陽光と、その熱さを和らげるさわやかな風を頬に感じながら、俺は独り、そんなことを思っていた。

レクリエーションルームの外。
扉一枚隔てた廊下の、開け放たれた窓の前。
俺はそこにいた。
部屋の中では、今も皆が楽しげに折り紙教室の真っ最中なのだろう。
それは、確かに俺が企画したものだし、望んだ光景ではある。
しかし、やはり居心地の悪さは否めない。ああ言う『あっとほーむ』な空気と言うのは、俺には向いていないのだ。
――何より、許されない。俺は、あそこにいて良い人間ではない。白い世界を黒く染める、汚濁した染みなのだ、俺は。
自嘲的に思いながら、俺はズボンのポケットに手を伸ばす。
取り出したのは、掌大の四角い箱。見慣れた嗜好品の紙箱だ。
そこから、すっかり慣れてしまった手つきで、中の一本を取り出そうとして――……箱を、握り潰した。
馬鹿なことをしているような気がした。滑稽で、無様で、情けないことをしている気がした。そんな自分が気恥ずかしくて――許せなかった。
くしゃくしゃに潰れた紙箱をポケットに戻し、嘆息一つ。
同時に、背後で扉の開く音がした。

「あ、たっくん見ーっけ♪」
そう言って、のほほんとした笑顔を覗かせたのは、他でもない、あの女だった。
「んふふっ♪　こんなとこにいたのねー」
気持ちの悪い含み笑いを漏らしながら、女はさも当然のように俺

の隣に並ぶ。
「どこにいようが俺の勝手だろ」
吐き捨ててやると、女は殊更くすくすと笑った。
「分かってる分かってる、あっくんの笑顔が照れ臭かったんだよね♪」
「はあっ！？　んで俺がそんなことっ――……」
訳知り顔で言う女にかっとなって、思わず叫びかけた。が、寸で思い留まった。
そう言うことじゃない。そうじゃないんだ。
「……分かんねえだろ」
嘆息して、続けた。
「どんなに笑顔だって、ヒトはナカに何を抱えてるか分かんねえ。あいつだって、笑ってんのは上っ面だけかも知れねえ……」
「――そっか。たっくんは、不安なんだね」
眩しい笑顔で、女はそう言った。
その笑顔があまりに眩しすぎて、俺の唇は空を切る。皮肉の一つも出てきやしなかった。

「たっくんだけじゃないよ。みんなそう。結果がカタチとして見えないモノは、不安で不安で仕方がないものだもの。どんなに自分が精一杯やったとしても……表面上は、上手くいったように見えても」
その言葉は、脳天気なこの女が口にしているとは思えないほど、不思議な重みがあった。
何も言えないでいる俺に、女は今一度微笑んだ。
「――大丈夫だよ、たっくん。キミがしてくれたことは、間違いじゃない。あっくんの笑顔は、間違いじゃない。キミは、暗い日陰で泣いていたあの子を、明るい日向に引っ張り出してくれた。それはとても尊くて……嬉しい、ことだよ」
その言葉は、俺のココロに掛かる黒い霞の幾らかを払ってくれた。けれど、完全には拭えない。……いや、或いは、この暗い気持ち

は、ヒトの生涯について回るモノなのかも知れない。
そう結論付けようとした時、女はふと言った。
「……まだ不安だって言うなら――お姉さんが、ご褒美をあげるよ」
「え？――」
意味を計りかねて声を上げたが――その時には、もうことは済んでいた。

――チュッ。

耳元に響く、そんな音。頬には、柔らかく、生暖かく、湿った感触。
けれど、嫌ではない感触。むしろ、飛び上がってしまいそうなほどに甘美な感覚だ。
体温を上昇させ、気分を高揚させ、全ての闇を振り払ってしまう、魔法のような感覚だ。
それが、女からのキスなのだと悟った瞬間――俺は、顔面から火を噴いた。
「なっ、なななっ！？　なにしやがルっ！？」
「あはははっ♪　真っ赤になってるー、可愛いんだー♪」
みっともないほど狼狽する俺を余所に、女は腹立たしいほど、けろっとして笑っている。
「あっ、あっ、あっ、あんたなあっ……！」
「何って、ご褒美だよ？　ご褒美もらえると、やった！　って気になるでしょ？」
頭が茹だってまともに言葉の出てこない俺に、女は尚も平然と言ってのける。あまつさえ――
「いきなりでよく分からなかったかな？　じゃ、もっかいしよーか♪」
何て言って、俺の首っ玉にしがみついてきた。

「やぁめぇろおおおおおおおおおおっ！」
「良いではないか良いではないか♪　減るもんじゃなしっ♪」
「あんたはどこぞの悪代官かあああああああああああ」
何とか振り払おうと身を捩るが、女は鬱陶しいしがらみのようにまとわりついて離れない。
「ほれほれ、いい加減観念して、その唇を余に差し出せぇい♪」
「ナズェ唇になっていルンディス！？」
「細かいことはいいじゃないっ♪」
女がそう言った時だ。助けは意外なところからやってきた。
「――良くないわーっ！」
そう叫んだのは俺ではない。
見れば、いつの間にやってきたのか、精一杯に肩を怒らせたひなたが立っていた。
「あら、やっほー、ひなたちゃん♪」
なんて、自身の姿に無自覚なのか何なのか、俺の首にしがみついたままに言う女。
ひなたはずかずかと大股で近づいてくると、そのままの勢いで俺と女の体をばりばりと引きはがした。

「いったい、なにを、しているんですかっ！？」
問い詰めるように、ひなたは女に言った。
「ん？　とっても良い子なたっくんに、ご褒美をあげてただけだよー」
「なっ……！？　どんなご褒美ですかっ！」
いつもののほほんとした顔で、しれっと答える女に、怒号を上げるひなた。
「あらら？　ひなたちゃんも興味ある？　可愛い顔して意外と……」
「そう言うことじゃないですっ！　てか、意外とってなんですかっ！？」
「さーなんだろー、おねーさんわかんないなー」

「きーっ！」
……。
突然始まった二人の言い争いは、まだまだ続きそうだった。
俺は嘆息して、すぐ後ろの窓枠に背を預けた。

……思えば、不思議なものだ。
ほんの少し前まで、俺はこんな場所、嫌いだった。弱者共の吹き溜まりと、見下していたのだ。
なのに、今は。
理由は分かっているのだ。誤魔化しようがない。今も眼の前でのほほんと笑う、あの女のせいだ。
あの女に出会ってから、俺は調子を狂わされっぱなしだ。この短期間、瞬きするほどの一瞬の間に、俺は俺らしくないことばかり重ねている。
でもそれを、俺自身、悪くないとも感じている。……それが一番、俺らしくないんだが。
――だから。
もう一つくらい、俺らしくないことが増えてもいいかな、と。そう思った。

「――なあ、あんた」
そんな俺の呼びかけに、二人は同時に振り返る。が、俺がこう呼ぶのはこの場に一人だけ。
「ん？　なあに、たっくん♪」
呼びかけられたことがそんなに嬉しいのか、女は妙にニコニコとして返す。
ひなたはひなたで、恨めしいような眼で俺を見るし。
取り敢えず、そんな二人の違和感は無視して、俺は続けた。
「……あんたの名前――教えてくれよ」
ずっと。出会った時からずっと、忌避してきたその言葉。

その言葉に、女は一瞬きょとんとして、すぐに苦笑した。
「……そっかぁ。ずっとおかしいなー、とは思ってたんだぁ。たっくん、いつまでたっても私のこと名前で呼んでくれないから。……あはは、教えてあげてなかったんだねぇ」
……そんなこったろうと思ってたよ。
嘆息する俺に、女は優しく微笑んで言った。
「――緋蔭（ひかげ）優（ゆう）。それが私の名前。……忘れちゃだめだからね？」
ああ、分かってる。忘れない。忘れられるわけがない。だからこそ、忌避してきたのだ。忘れられない思い出など、持たぬために。余計なしがらみなど、持たぬために。

――それは、覚悟だった。

「……ああ、忘れないさ――……ゆう、さん」
その優しい響きを、自身に確認するように、呟く。
……忘れない。忘れないさ。あんたのこと、あいつのこと――ついでに、馬鹿な女のことも。
ずっと忘れない。この日のことを。

――ヒカゲと、ヒナタと、小さな紙ヒコーキのことを。

【朱色優陽１《ひかげとひなたと紙ヒコーキ》終】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6657m/

『朱色優陽―アケイロユウヒ―』１

2010年10月8日14時10分発行